[特集] 湧出70周年。菊池温泉街の再出発ー

Re:start

人通りがまばらな菊池温泉街。観光客は年々減り続けている

scene1 | 温泉街の現状

「このまま何もしなければ『菊池温泉』という言葉自体がなくなるかもしれない」。菊池温泉街の今後を考える会議で、ある関係者はこう話しました。

バブル期に最盛期を迎え、多くの団体旅行客で盛り上がりを見せた菊池温泉街。しかし、変わりゆく旅のニーズを捉えきれず、宿泊客は減少。バブル崩壊後、多くの宿泊施設が廃業に追い込まれました。にぎわいは薄れ、通りを歩く人も少なくなっています。

そんな中、宿泊施設や飲食店、行政などが集い、温泉街の再生に向けた検討が始まりました。

「このままではいかん」「これが最後のチャンス」。今年で湧出70周年を迎える菊池温泉を次の世代に残そうと奮闘する関係者たちの思いに迫ります。

【問い合わせ先】観光振興課
☎0968(25)7223

現　在

昭和46年頃

写真㊨（昭和46年頃）　温泉湧出以来、旅館やホテルが相次いで建設されました。右の建物は「ホテル進都」（元「隈府会館」）、左は手前から公衆浴場「夢の湯」、「花屋旅館」、「湯元旅館」。丘の上の建物は上が「月見殿ホテル」、下は「酔仙閣」です。

市立図書館のデジタルアーカイブでは、施設のマッチ箱や昔の温泉街の様子など、画像で見ることができます

| scene 2 | 観光客が押し寄せた菊池

温泉街の繁栄と衰退

最盛期には年間40万人が訪れ、活気にあふれていた菊池温泉街。そのにぎわいも長くは続かず、過去のイメージに縛られ苦境に立たされます。温泉街と共に過ごしてきた関係者に当時の様子を聞きました。

桑畑が観光街に

菊池温泉の歴史は比較的新しく、泉源を発掘したのは昭和29年でした。当時の隈府町の商工会長だった村川信彦さんや有志が「町を発展させたい」と官民を巻き込み温泉開発に成功。桑畑だった正観寺周辺は一変しました。

昭和30年には旅館第1号として隈府会館が開業。大中小の温泉旅館建設が続き、軒を並べました。

九州各地から車で2～3時間と地理的に有利な他、菊池渓谷をはじめ観光名所にも恵まれ、県内有数の温泉地に発展しました。昭和50年頃には社員旅行などの団体客が宿泊者の大半を占めるようになりました。

きらめくネオン、盛り上がる宴会

「この時期、温泉街は人混みでまともに歩けなかったよ」と話すのは菊池温泉観光旅館協同組合（以下：組合）の岩永誠代表理事。毎週末、花火大会のような活気がありました。

「朝まで宿泊客のゲタの音が鳴り止まなかった。近所から苦情がきたから、音がしないよう履物を雪駄に切り替えたんだよ」と当時を振り返ります。

菊池温泉観光旅館協同組合
岩永 誠代表理事

組合に加盟する宿泊施設は最盛期には25軒を数え、約2千人の宿泊客を収容できました。温泉街の近くには飲食店やバーが約80軒立ち並び、夜の歓楽街も形成されました。

バブル景気の頃には絶頂を極め、年間40万人の宿泊客が菊池温泉街に押し寄せました。「気付いた時にはお客さんの大半が男性ばかりになっていた」と岩永代表理事は話します。

温泉街存続の危機

そんな時代も長くは続きませんでした。バブル崩壊後は宿泊客は減少。多くの宿泊施設で経営が悪化しました。旅行スタイルが団体から個人へシフトする風潮もあいまって、平成元年ごろをピークに宿泊客の数は年々減り続けました。

菊池温泉おかみ湯恵の会
樋口和代会長

「今のままではいけないという危機感がありました」と話すのは菊池温泉おかみ湯恵の会の樋口和代会長。組合や行政などと一緒に、九州一円の旅行代理店や各種団体を300カ所程度回り、宿泊客獲得を目指しました。

他にも、家族連れや女性客にも訪れてもらおうと、平成16年から市内の街歩きや地元料理のふるまいを始めたといいます。

しかし、減少した客足は思うように戻らず、多くの宿泊施設が廃業に追い込まれました。「団体客を中心とした歓楽的な温泉街のイメージが払拭できませんでした」と樋口会長。現在、組合に加盟する宿泊施設は7軒。温泉街にとって危機的な状況が続いています。

菊池温泉のはじまり

斜陽のまちを救った村川さん

その昔、カイコと衣料の町として知られていた菊池。戦後は斜陽のまちとして廃れるばかりでした。そんな中、昭和26年に「観光都市として発展させるために温泉を掘削したい」と立ち上がったのが当時の隈府町・商工会長の村川信彦さんを中心とした有志たちでした。

掘削事業に必要な資金は1千万円。協力金を募るために町内を毎日のように自転車で駆け回り、見事資金を調達しました。昭和29年に現在の東正観寺付近で掘削を試みたところ、待望の温泉が湧出。村川さんの功績をたたえるため、昭和52年には名誉市民に選ばれています。

村川信彦さん

温泉湧出の後、昭和29年12月にオープンした隈府温泉の仮設浴場。隈府会館内の公衆浴場が完成するまで利用された

菊池温泉薬師祭

受け継がれる思い

菊池温泉観光旅館協同組合では、初めて温泉が湧出したことにちなみ、毎年10月30日を「温泉湧出の日」としています。

その日には、温泉の恵みと温泉発掘に携わった人たちに感謝を込めて、薬師堂で薬師祭を開催。先人たちの思いは70年経過した今でも受け継がれています。

薬師如来像に温泉の湯をかけ、恵みに感謝する

㊧㊤「新・湯治」で森林浴や座禅体験などを体験する参加者。入浴に加え、周辺の地域資源に触れる体験することで菊池温泉の付加価値を高める狙い

㊨景観整備に合わせてデザインされたちょうちん。温泉街周辺の宿泊施設や飲食店の軒先を彩る

| scene 3 | 再生に向けた道筋

崖っぷち。温泉街を次世代に残すために―

宿泊者が減少する菊池温泉街でにぎわいを取り戻そうと温泉街リブランディング事業がスタートしました。魅力的な温泉地に生まれ変わるための取り組みが進んでいます。

熊本の温泉地の再生モデルに

客が減り続ける温泉街。平成17年の市町村合併時の宿泊客は約23万人。その後、右肩下がりで推移し、令和4年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあって約12万人と合併時のほぼ半分に留まっています。

官民連携での取り組みは続いていましたが効果は一時的。根本的な解決には至っていませんでした。そんな中、県が温泉を生かした地域づくりのために昨年度から新たに「熊本の温泉街リブランディング事業」を開始。市は温泉街の魅力向上を目的に事業採択を進め、モデル地域に指定されました。

「観光資源を生かして熊本の温泉地の再生モデルになってほしい」と県の後藤啓太郎審議員（取材当時観光企画課）は温泉街の将来に期待を寄せます。

今年の3月には再生に向けた「菊池温泉街リブランディング基本構想」を策定。基本構想を基に、旅館の経営基盤の強化や宿泊客が地元の飲食店で食事を取る「泊食分離」の推進、温泉街一帯の景観づくりなどの取り組みが進められています。

菊池温泉街の現状や今後について意見を交わす関係者たち

温泉×豊かな地域資源

今年の10月には、周辺の自然や歴史・文化、食などを生かした体験と温泉を組み合わせた「新・湯治」のモニター調査を実施しました。

従来の「湯治」のイメージである「温泉入浴を中心とした療養」に加え、菊池の自然環境や歴史・文化などに触れることで参加者のリフレッシュ効果を検証することが目的です。

産後ケア

赤ちゃんにベビーマッサージをする母親たち。温泉施設を活用した産後ケア事業の取り組みは全国的にも珍しい

新・湯治

調査結果をもとに温泉の効能を科学的に検証。結果を基に、他の温泉地との差別化や旅行商品の開発につなげる

泊食分離

泊食分離を導入することで宿泊施設の稼働率を上げ、飲食店の利用を増やすことで、まち全体の活性化にもつなげる

これが最後のチャンス

当日は外国人を含め市内外から20人が参加しました。菊池渓谷での森林浴の他、郷土料理作り体験や玉祥寺での座禅体験など、市の魅力を2日間で体験。各日の最後には旅館での入浴体験も行いました。

「温泉の泉質が最高だった」「地域住民との触れ合いが楽しかった」「新しい菊池の魅力を知ることができた」などと参加者の評価も高く、全員が「ストレスが減った」と回答。「今回の体験を家族や友人に勧めたい」と感じた人が全体の8割を超えるという結果が出ました。温泉と地域資源を組み合わせて付加価値を高め、宿泊客の獲得を目指しています。

子育て中の母親をサポートする「産後ケア事業」でも、温泉街の旅館・ホテルを活用しています。温泉を使って、育児に追われる母親たちに心身を癒やしてもらうのが狙いです。令和4年からスタートした事業で、市内の子育て世帯の育児ストレス緩和にもつながっています。

「今の温泉街は崖っぷち。リブランディング事業が再生の最後のチャンスだと思っています」と話すのは、菊池観光協会の松野康代表理事。自身も菊池グランドホテルの支配人としてホテル経営に携わっていることから、今の状況に強い危機感を持っています。

「宿泊施設は観光の入り口。市全体の経済活力を高めていくためにも、菊池に宿泊客を始めとする観光客を引きこむことは極めて重要です」と松野会長は続けます。「これまでとは違った新しい視点を取り入れるために若い世代の人たちとも話をしています。次の世代に温泉街を残すために、一人一人ができることをやっていきます」

菊池観光協会
松野 康代表理事

アドバイザーに聞く――　| キーワード リブランディング

温泉街が生き残るために必要なもの―

リブランディング事業にアドバイザーとして参加しています。事業成功のためには次の2点が特に重要です。

一つは「菊池温泉といえば○○○」といった全体のブランドイメージの確立。もう一つは個々の旅館の具体的な個別ターゲットの設定です。これらがうまくマッチングしていけば事業が円滑に進んでいくと考えています。

菊池温泉はとにかく湯量が豊富。こんなにたっぷりと源泉をかけ流しているのはあまり見たことがありません。泉質も肌触りがなめらかで、魅力的な温泉地です。

さらに、菊池渓谷の自然や菊池一族の歴史、おいしい農産物など、温泉以外の魅力もたくさんあります。

温泉と地域資源を組み合わせ、他の温泉地との「違い」を出していくことが、これから生き残るために必要になってくるのではないでしょうか。

㈱ビズユナイテッド
宮口直人さん

| scene 4 | 事例から探る解決の糸口

再生のヒントは、官民連携

再生に向け歩みを始めた菊池温泉街。同じような規模ながら、官民が連携し、魅力的な温泉街に変貌した長門湯本温泉（山口県長門市）の関係者に話を聞きました。

危機感の少なかった当事者

長門湯本温泉は山口県で最も古い歴史を持っています。昭和59年には過去最高の宿泊客数を記録。しかし、他の多くの温泉街と同じように団体客が減り、にぎわいが失われていきました。

こうした危機的状況の中、平成28年に大型リゾート運営会社と協定を締結。公衆浴場や遊歩道など、温泉街の中心施設を整備するマスタープランを策定しました。

しかし、まだ宿泊事業者や飲食店などの地元の人には「行政とリゾート会社がなんとかしてくれる」という空気があったんです。

観光業はまちづくり

市の土地をどう開発するかの検討や住民の合意形成などは、行政にしかできないこと。でも、施設を整備してもそれが赤字になってしまっては意味がない。私たちはあくまで支援する立場として、事業主体は民間に任せる方針でプロジェクトを推進しました。

地域住民とは徹底的に話し合いを続けました。思いが伝わり、平成29年には旅館の後継者を中心とした民間事業者出資のカフェがオープン。温泉街に新店舗ができたのは20年ぶりでした。以降、現在までに17の事業所が新たに開業しています。官民一体となって事業を推進する。それが長門湯本温泉の特徴なんです。

観光業は、外貨を獲得して事業者が潤うだけでなく、地域住民が外部の人と交流する貴重な機会。また、旅行でそのまちに来てもらうことで関係人口の増加、ひいては移住にもつながる可能性があります。

観光業はまちづくりの一環といっても過言ではありません。宿泊施設が集まる温泉街はその核になるものです。だからこそ、地域住民が中心となった再生を進めることが必要だと考えています。

1_長門湯本温泉の全景 2_ライトアップされた竹林の階段 3_温泉街の中心を流れる川には遊歩道や川床、飛び石などを整備 （写真提供：長門市役所）

長門市役所
松岡裕史主査

【長門湯本温泉】 山口県で最古の温泉地。近年は街全体の再整備が進み、立ち寄り湯や川床テラス、街中を照らす幻想的なライトアップの演出、次々と進出する新しい宿泊施設や飲食店、商店と、「歩いて楽しい温泉地」に変貌している。

菊池温泉街リブランディング検討委員会に委員として参加しています。

菊池で生まれ育ち、隈府の商店街で飲食店を開業して17年目です。温泉街に近いため、通りを歩く浴衣姿の宿泊客をたくさん見てきました。最近はめっきり少なくなり、商店街も空き店舗が増え、ずいぶん寂しくなっています。

もし、旅館の灯が消えてしまったら、観光客はより集客力のある地域に流れてしまい、菊池に来る人はますます少なくなります。

だから、リブランディング事業の成功はこのまちが盛り上がるため絶対に必要なもの。人が消えつつある菊池に人を呼び戻す重要な手段なんです。

旅館、飲食店、市民、行政が一丸となって、これからもっといろいろと仕掛けていきたい。

みんなで取り組めば菊池はもっと良い方向に変わっていくはずです。そのためにできることは何でもやっていきたいと思います。

会議で意見を話す神田さん。「思いをぶつけ合いながら、菊池を盛り上げたい」

再生に向けて全力を尽くす

肴屋 夢路　**神田祐樹**さん

| scene 5 | 地域住民の思い

菊池温泉街の灯を消したくない ―

温泉街を残したいと考えているのは旅館の経営者だけではありません。強い思いで温泉街を盛り上げようと活動する人たちに話を聞きました。

たくさんの人に魅力を伝えたい

ボードゲーム喫茶 しんきんぐ
高本梨花さん

幼い頃から温泉街にある旅館の温泉に通っています。

県外から友達が遊びに来たときは、必ず菊池温泉に案内しています。「泉質が最高だね」「足湯がたくさんあって楽しい」などと評判がいいです。

私は大学時代に県外に出ましたが、卒業後、帰ってきたのはこのまちと菊池温泉が好きだから。もしなくなってしまったら、市外に引っ越してしまうかもしれません。

温泉街のノスタルジックな雰囲気も大好き。一方、女性が気軽に入れるお店が少ないとも感じています。おしゃれな店舗がもっと増えれば、若い世代のお客さんがもっと来てくれるんじゃないでしょうか。

私も微力ながら菊池温泉の良さを知ってもらえるよう、宿泊施設と提携して、経営店舗のイベント来場者に温泉チケットを配布しています。

市内外問わず、もっと多くの人たちに魅力を伝えていきたいですね。

菊池温泉街にある足湯で友人たちと談笑する高本さん

リブランディング事業が目指すもの

温泉街を包む新しい光

「こんな温泉街初めて見た」「観光客の人と交流できたのが楽しかった」

10月5日・6日に行われた「ほろよいあかり」では、訪れた人たちが幻想的な雰囲気を楽しんでいました。夜の新たな景観創出に向け、温泉街の道沿いをライトアップするという初めての試みです。

「過去のイメージを払拭して、温泉街の新しい姿を見せたい」と宿泊施設や飲食店、地元、行政の関係者が一体となってつくり上げました。

同時開催のイベント「温泉街deはしご酒」も大好評。2日間で約1200人が来場し、参加者は近隣の飲食店巡りを楽しみました。音楽ライブも行われ、いつもとは違った温泉街に楽しそうな笑い声が響き渡りました。

大切なのは「暮らしそのもの」

温泉街では再生に向け、日本名湯百選に選ばれた温泉だけでなく、自然や歴史・文化、食といった「菊池の暮らしそのもの」を組み合わせ、官民が連携して新たな魅力創出に取り組んでいます。

地域全体で訪れる人たちをもてなすこと。そして、地元の人も楽しいと思えるまちにすること。そうすることで、さらなる交流が生まれ、「また訪れたい」と思ってもらえるような魅力のある温泉街になっていくのではないでしょうか。

菊池温泉湧出から70年―。次の世代につなげるために新しいスタートを切りました。

ライトアップした正観寺前。地域の食と周辺散策を組み合わせたイベントなど、今後も人を呼び込む取り組みを進める